

高橋(三沢市)④

体の芯まで届く暖かさ、長持ちする余熱、心を癒やす炎。環境意識の高まりを背景に近年、木質ペレット燃料を使うストーブが注目されている。三沢市新町2丁目の「高橋」は2014年からペレットの生産、販売を手掛け、生産量は16年に600ト、17年に800トと右肩上がり。18年は千ト超えを見込む。

同社は1997年に製材所としてスタートした地元のお舗企業。多彩な事業展開を経て、現在は主にペレットと、全国の工務店対象の住宅用建材販売を収益の二本柱としている。創業から4代目の高橋博志代表(59)によると、売り上げは半々だが、ペレットの伸長が顕著という。

納入先は各事業所のボ



■金曜日企画■



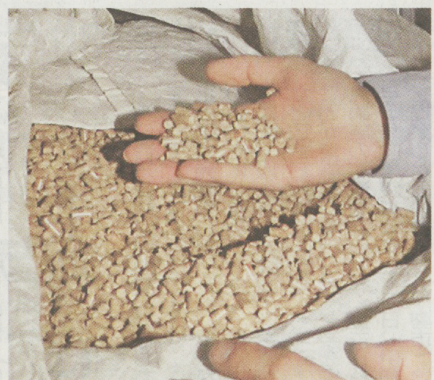
丸太の皮をむき、破碎する作業に当たる「高橋」の従業員

木質ペレット生産伸長

「暖かさ」に絶対の自信

イラーや一般家庭のストーブ、店頭販売するホームセンターなど。昨夏、新たに設備投資をして増産態勢を整えた。

原料は青森県南地方の杉のみ。樹皮を入れない「ホワイトペレット」が売れた。高橋代表は「皮が入ったペレットに比べ、暖かさが各段に違う」と強調。灰の量が少なく、ストーブのメンテナンスをしやすいくことも特長と胸を張る。



木質ペレット燃料。表面の光沢は木に含まれるリグニン。形成の際に接着剤の役割を果たす

製造工程では、丸太の樹皮をむいて細かく砕き、おが粉を熱風で乾燥させた後、直径6ミ、高さ15ミ程度の円筒形の粒に圧縮成形する。おが粉は加熱すると、リグニンという物質が溶け出してくる。接着剤の役割を果たす。ペレットの表面がつるつるなのは、このリグニンによるものだ。

むいた樹皮は乾燥機で燃料に活用。また、成形の際に発生した余計なおが粉はできるだけ落し、再び原料に回している。

丸太の調達方法は2通り。主流は森林組合などから四つの等級(A〜D)のうち、柱や合板に使えないCやDを購入する。もう一つは、個人が所有する山で伐採した間伐材を買収するケース。高橋代表が理事長を務めるNPO法人「青森バイオマスエネルギー推進協議会」主催の「実践的キョリ養成講座」で、間伐のノウハウを学んだ参加者の持ち込みに対応している。まだ数は少ないが、高橋代表は「少しずつ広がってきているので、それ

の受け皿になれば」と話す。ペレットストーブの人気の背景は何か。高橋代表は消火後もしばらく余熱が続くなど「灯油とは温かさが違う」点を挙げている。また、高級品のまきストーブとの比較では、ペレットの調達や保管がまきより容易なこと、ストーブ自体の価格がやや安いことなども指摘する。

一方、消費者にとってのデメリットはやはりコスト。ペレットは灯油1リットルで同等といわれるが、最近の灯油価格は70〜80円で収まっている。灯油ストーブのようにスイッチ一つで点火というわけにもいかない。

高橋 三沢市新町2の31の2171、高橋博志代表。資本金4500万円。1997年に同市古間木山で製材所として創業、34年に現在地へ移転。64年に株式会社化し、業態の変遷を経て現在に至る。社員は高橋代表以下7人。電話番号0176(53)4175。



高橋(三沢市) ①

青森県内で4社ある木質ペレット燃料製造業者の中で、県南地方を中心に着実に売り上げを伸ばす三沢市の「高橋」。その陰には失意の底からは上がった再生の物語がある。

同社は高橋博志代表(54)の祖父が1927年に丸の一本で始めた製材所がルーツ。手広く事業を展開していたが、99年に火災で工場を全焼



■ 金曜日企画 ■



原料の丸太を前に製造工程を説明する高橋博志代表

Economic

エネルギー 地産地消を

自家発電でペレット製造

し、事態は暗転した。高橋代表は「一当時は思い出すと今でも胸が締め付けられる」と振り返る。

製材所を再建したものの、製材業の需要は先行き不透明。ただ、山林も所有しており、木に関わる事業への未練は拭い切れなかった。

転機は2007年9月、新潟市にあるペレットストーブ製造販売会社の社長と知り合ったこと。当初はペレットを単なる燃料としか考えていなかった高橋代表だが、エネルギーの地産地消の発想に共感した。

県内の暖房は灯油が主流で、1世帯当たりの年間消費量は北海道と、2位を争う。輸入された

原油がもとの灯油は使うほど地域からお金が出ていくが、地元産の木質バイオマス燃料なら地域のお金とエネルギー、資源を循環させることができ



製品は「青森みらいペレット」の名前で梱包(こんぼう)、出荷される



ペレット製造の最初の工程となる丸太の皮むき

高橋代表は「この規模の工場では日本初」と胸を張る。BDFは八戸市の障害福祉サービス事業所「こたまの園」から調達している。

そのこだわりはペレット以外でも「愛の着火材」という人気商品を生んだ。結婚式場などで出る使用済みのろうそくや、おが粉を原料とし、三沢市の就労継続支援B型事業所「ワークランドつばさ」が製造を担当。ペレットやまきストーブ、バーベキューなどに重宝し、全国展開する大手アウトドアショップでも取り扱いは始まった。

リサイクルは総じてコスト高となる側面がある。その中で利益を出す難しさを感じつつも、「循環型社会の軸はぶらしたくない」と揺るがぬ信念を強調する高橋代表。ペレットの将来性について「県南で大型のバイオマス発電が近く稼働する予定だが、その次は小型の発電の波が来る」と展望する。

収益のもう一つの柱である住宅用建材販売では全国の工務店など1600社と取引。バリアフリーなどのリフォーム用部材が多い。在庫を抱えるリスクがないメーカー直送の形態を取っている。

工場の特徴は、太陽光発電と食用の廃油を再利用したバイオディーゼルの燃料(BDF)の発電機で電力を賄っている点。

(工藤文一)